

## ピリピ人への手紙1章12-26節 「生きることはキリスト」

### 1A 福音の前進 12-18

1B 鎖によって 12-14

2B 妬みによって 15-18

### 2A キリストこそが命 19-26

1B キリストの現れ 19-20

2B 喜びの板挟み 21-26

## 本文

ピリピ人への手紙 1 章を開いてください。私たちは前回、11 節まで読みました。今日は 12 節から始めます。私たちは前回学びましたように、ピリピ人への手紙は、パウロがピリピにある教会から献金を受け取ったことが機会となって、手紙を出しているものです。ピリピという町はローマによる植民都市で、パウロたちの宣教で最初に福音を伝えたヨーロッパの町です。そこで激しい迫害に遭いました、パウロとシラスを監視していた看守を始め、人々がイエス様を信じました。彼らはパウロを慕っており、愛しており、献金を何度となく送っています。そしてパウロは今、ローマで軟禁状態になっています。皇帝の前で裁判を受けるためです。判決によっては、彼は死刑にされる可能性もあります。そんな中で、彼は主にあって喜びに満ちあふれている手紙を送りました。

再び、キリスト者の喜びは、環境や状況に拠らずに、専ら主イエス・キリストとの交わりから来るものであり、この方だけが私の生き甲斐となっている、その献身から出てくるものです。

### 1A 福音の前進 12-18

1B 鎖によって 12-14

1:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。1:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、1:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。

「さて、兄弟たち。」とパウロは言っています。パウロは彼らのために、祈りを捧げました。そして、新しい話題に入りますが、「私の身に起こったことが」と言っています。これは、彼がローマで鎖につながれていることを意味していました。しかし、彼は鎖につながれていながら、何をしていたかと言いますと、大胆に何ら妨げられることなく、福音を伝えていたことです。「福音を前進させることになった」とありますね。「使徒 30-31 節 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエ

ス・キリストのことを教えた。」この時に、彼は鎖につながれていました(28:20)。しかし、彼のところにはユダヤ人たちがやって来て、彼から福音を聞いています。

そして、ローマ兵たちが彼の語る福音を聞かねばなりません。ここに「親衛隊」とありますが、ローマ皇帝直属の部隊です。彼らがパウロを監視しました。6 時間毎に兵士が交替します。ですから、パウロは一日、四人はキリストを宣べ伝えることができました。兵士は鎖でつないでいますが、実は彼らこそが福音を聞くことにおいては鎖につながれていたのです。さらに、皇帝の周辺、役人たちにもこの訴状について話が伝わっていたはずで、「そのほかのすべての人にも明らかにあり」とあります。このようにして、ローマの中枢部にて福音が伝わっているのです。

パウロはなぜ、鎖につながれ、判決によって死刑になるかもしれないような時に、このように信仰によって自由になれていたのでしょうか？彼は、ローマで証ししなければいけないことを、主によって示されていたからです。彼はエペソで宣教活動をしている時に、「私はそこ(エルサレム)に行ってから、ローマも見なければならぬ。」と言いました(使徒 19:21)。そしてカイザリヤで牢獄に入れられていた時に、主が横におられて、「23:11『あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ。』』と言われた。」とあります。そしてローマ人への手紙をコリントの近くのケンクレヤから出し、エルサレムに行ってからローマに行きたいという強い願いを書いています(15:23-24)。ですから、ローマに今いるということが、彼は神の御心であることをはっきりと知っていたのです。

けれども、彼は、鎖につながれてローマに来るようになるとは思っていなかったでしょう。しかし、それでも、鎖は神の御心であると彼は確信していました。なぜなら、彼は福音のため、その証しをしている中で捕まえられて、今、ここローマにいるからです。神の御心を行なって、それで置かれている状況は、それは神の御心によって起こされたものだからです。

そして、彼は大体な発言をするのです。同じく牢獄から書いたエペソ人への手紙の中で、パウロは、「**あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。(3:1)**」と言いました。彼はローマの囚人でありましたが、そしてローマは不当な理由で彼を束縛していましたが、彼は「それはキリスト・イエスがしたことなのだ」とはっきりと言っています。彼の喜びの源泉が、主イエス・キリストを知ること、この関係の中にある知識であることがお分かりになるでしょうか？主イエス様が、私をこのようにしたのだ、という確信です。それが、いかに不利に見える状況であっても、これは主が行われたのだという確信です。これを知った人は、怖いものはありません。

さらに、ピリピにいる信者たちに伝えたかったのは、14 節、ローマにいる兄弟たちがパウロの幽閉によって、かえって信仰が強められ、恐れることなく、大胆に主の御言葉を伝えたということです。彼らは落胆していませんでした。むしろ、ローマの親衛隊や皇帝周辺に福音が広がっているということは、私たちもローマの権威を恐れず、福音を伝えればよいではないか、と思ったのです。ちな

みに、「大胆に」という言葉が出てきたら、それは「無実だと分かっている」という意味合いなのだと  
いうことを思ってください。福音を大胆に伝えるとは、法廷に立っても、自分が無実だと分かっ  
ているので、恐れることなく弁明できるという意味で使っています。

## 2B 妬みによって 15-18

しかし、私たちにとって試みに遭うのは、世による反対、不信者による反対ではありません。彼ら  
は反対するのは当たり前、主を知らないからと理解できるからです。けれども、もし信者から反対  
を受けたらどうでしょうか？これは、落胆させられます。しかし、次から見るパウロには、そのような  
反対にあっても、なおのこと喜んでる姿を見ます。

1:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もありますが、善意をもってする  
者もあります。1:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てら  
れていることを認めています。1:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キ  
リストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。1:18 すると、どうい  
うことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリスト  
が宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでます。そうです、今からも喜ぶことでし  
ょう。

パウロの福音宣教によって、ローマの権威を恐れずに、福音を伝えようと大勢の兄弟たちが励  
まされました。ところが、そこで元々、存在していた教会内の問題が顕在化しました。パウロが福  
音宣教者として神に立てられていると認めていない者たちが、ローマにもいたのです。パウロの手  
紙を読みますと、使徒の働きにも少し書かれています。手紙の中に数多く見出されます。彼が、  
イエスと共にいた十二弟子ではないこと、そして異邦人に宣教していたこと、その福音にある恵み  
に対して、不服としていた者たちがおり、そうした者たちの影響を受けて、パウロのことを疑う、見  
分けることのできない、幼い信仰をもった信者たちもいました。

その中には、ユダヤ主義という異端を奉じていた者たちもいます。それは、「イエス・キリストを信  
じること、この方を信じて生きることが、私たちの全てである。」ということに不服とし、「それだけ  
は足りない。ユダヤ人の中に入らなければ神の国に入れられない、救われないのだ。だから、割礼を  
受けて、モーセの律法も守らなければいけない。」と言ったのです。イエス・キリストだけだ、とい  
うことを私たちの肉は嫌がります。何かを行なって、それでその行ないを認められたいと願うのが、  
私たちの肉です。その思いを教えの中に取り組んでいるのが、ユダヤ主義です。ピリピの教会の  
中にも、その偽りの教えを報じる教師たちがやって来ていたようです。3 章は、彼らのことをパウロ  
は、「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気  
をつけてください。(2 節)」と言っています。

しかし、ここではパウロは、そうした偽りの教えを広めている者たちのことを話しているのではな

いでしょう。異端の教えならば、その伝えているキリストは別のキリストになっており、性質の異なる、福音ではない福音と呼ばれているものを伝えているのですから、パウロは喜ぶはずがありません。ここでは、パウロに対して妬みを抱いている者たちが、キリストを伝えているということです。

おそらく、こんな感じになっていたと思います。パウロが使徒としての権威を神から与えられて、それで教えています。けれども、その教えは受け入れているものの、「彼だけが権威をもって伝えている。それはおかしい。私にも福音が与えられている。なぜ、彼はその働きを占有しているのか？」と考えていたのでしょう。それは一見、正しいように見えて非常に間違っています。それは、ここにあるように「党派心」そのものです。神がパウロをお立てになったのです。それはパウロが素晴らしいからではなく、神がその恵みによって立てられたのです。そのことを認めることで、パウロではなく、神とキリストご自身が働いておられ、自分にも主が共におられることを知るので、「なぜ、彼だけが・・・」と思うのは、人間的な平等主義であり、神の御心ではありません。

そのような人々は、キリストは宣べ伝えても、それは人々をキリストに引き寄せられるのではなく、自分自身に引き寄せることとなります。そして、キリストの名を使っているので、外見は正しいことをしているように見えます。けれども、他の人々は気づかないでいますが、パウロ自身は貶められ、さらに苦しめられています。パウロの働きで、ローマとその周辺では兄弟たちが大胆に福音を語り始めましたが、その中に混じって、パウロから引き離す形でキリストを宣べ伝えているのです。そしてもちろん、少なからずそうした動きに影響を受けている人々はいたことでしょう。

しかし、パウロは、こうした妬みと争いから自由にされています。なぜなら、彼の思いはキリストご自身にあったからです。「自分ではなく、キリスト」だったのです。キリストが宣べ伝えられている、それは妬みで行われていることを知っていても、もっと大きな神のご計画を見れば、そのような悪い動機であっても、ご自身が御子キリストを人々に知らせたいと願っておられる。したがって、そうした悪い働き人を通してでも、神は人々をお救いになる、と考えたのです。ここまで、パウロの心は広くされています。後にパウロは、「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主が近いのです。(4:5)」と言います。主が来られるのが近い、ゆえに神の国の到来が近いです。神の国は、私たちの思いをはるかに超えて、人々を救う形で臨んでいます。その中で、神は人々のそうした欠けがあっても、その欠けを通してでもご自分の救いの業を行われようとしているのです。

(ローマ 14 章にもありますが、基本的に、主のしもべは主人によって評価されるのであって、他のしもべを裁く立場にはありません。気をつけなければいけないのは、ここです。「誰々がこんな間違ったことを行なっている、また、教えている。」ということを行っている人は、どこに行っても、人々にある欠点を見て、歩き回ることでしょう。なぜなら、僕の身分なのに、主人のつもりになって他の僕を裁いているからです。パウロと同じ思いになるならば、たとえある人々の働きに同意できない部分があっても、また欠けがあっても、それでも神はその人たちを用いられているのだ、と思えるはずで、その人たちの働きを通して、神は救いの御業を行なわれているのだ、と思えるはずで、

もしそれができなければ、実は、自分自身に相手の中にある嫌な部分が、存在していることに他なりません。兄弟の目にある塵は見つけますが、自分の目の前に梁があることに気づいていないのです。大事なものは、その僕ではありません。キリストご自身です、そして福音による神の国の広がりです。)

## **2A キリストこそが命 19-26**

### **1B キリストの現れ 19-20**

1:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。

パウロは霊の戦いの本質をわきまえています。主にあって喜ぶこと、たとえ鎖につながれ、自分を引き落とすためにキリストを宣べ伝えている者があっても、いや、鎖につながれているからこそ福音が前進し、妬みをもって伝えている者たちがいるからこそ、キリストがさらに宣べ伝えられている。このように考えることこそが、彼を救っていると言います。この「救い」というのは、信仰によって自分の心と思いが守られているということです。自分が落胆によって、敵の惑わしを受けて、信仰を揺るがしたり、信仰から離れたたりすることがないように守られている、ということです。後に、主にあって喜ぶことが、自分にとって安全のためになる、と言っています(3:1)。主にある喜びを保っていること、これこそが救いになり、自分が守られるのです。

そして、パウロは、ピリピの人々が自分のために祈ってくれていることが、救いにつながっていることを知っています。それだけ、彼は聖徒たちの祈りを信じていました。エペソ人に、このように祈りの要請をしています。「エペソ6:19-20 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」多くの教会で、また宣教の働きで、牧師や宣教師が説教をしている同時間に、祈りを捧げている奉仕があります。同時間でなくとも、具体的な働き人のために祈ってくれている人々がいます。私にも必要ですし、してくだっている方々は多いと思います。ぜひ続けて、祈ってください。

それから、「イエス・キリストの御霊の助け」とありますね。聖霊の力は、主イエス・キリストが与えてくださるものです。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。(ヨハネ 14:16)」そして、このことは御霊の力が臨む時に、イエス・キリストが自分自身に明らかにされることも意味します。御霊が働かれる時に、私たちは主イエスご自身が近くにおられる、その臨在を知ります。

1:20 それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切な

る願いと望みにかなっているのです。

パウロは、福音を伝えるにあたって、「恥じることなく」という言葉をたくさん使いました。有名なのはローマ 1 章 16 節です。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」ここで話している恥は、単なる羞恥心のことではありません。裏切られて失望する、落胆するという意味も含まれます。ちょうど、イエス様が死なれた後の弟子たちは、恥を受けました。メシヤであり、イスラエルを贖われると思っていたのに、十字架に付けられたのです。二人の弟子たちが、エルサレムから離れてエマオの村に向かっていました。あれが、恥を受けた状態です。しかし、キリストは甦られました。私たちの希望は失望に終わることはありません。そして、恥をかくことはありません、福音には人を救う神の力があるのです。

そして、パウロの切なる願いと望みがありました。この「切なる願い」は、前に置かれているものを捕える為に、首の筋を違えてしまったという意味合いがあります。そこまでパウロが願ったことは、「私の身によって、キリストのすばらしさが現わされる」ことです。このギリシヤ語は単なる現わされるではなく、「偉大なものにする」とか「大きくする」という意味です。つまり、この地上でキリストについて語られても、それが何か遠くの存在のように人々は感じます。しかし、ちょうど望遠鏡によって遠くの星を近くで見ることができるよう、パウロの生き様にキリストが目の前に現れるかのような、そのように用いられたい、ということでもあります。主ご自身が、十字架の上でそれを行われました。ローマの百人隊長が、その一部始終を見て、「この方はまことに神の子であった。(マルコ 15:39)」と言ったのです。

そこで大事なものは、ここで「生きるにしても、死ぬにしても」と言っていることです。生きるだけでなく、死ぬことにさえ、キリストのすばらしさが現われるという信念です。どのように？と思われるかもしれません。私たちはとかく、「証し」というと何か特別な技術がなければできないと思うかもしれませんが、そうではなく、生きるのはキリストと次にパウロが言いますが、キリストが自分の命だと思っている人々の中には、必ずキリストの物語が展開します。その人を通して、キリストが周りの人々に現れてくださるのです。

聖書では、そのような信仰者の生涯で満ちています。ヨセフが、どのようにしてキリストを現したのかはご存知だと思います。兄に売られて、エジプトの奴隷となり、父ヤコブから死んだ者とみなされていたが、彼は異邦人の支配者となり、また兄たちによってあがめられる人となりました。兄たちは彼に罪を犯しましたが、そのことによってヤコブの家族が飢饉から救われるために用いられました。これらがすべて、ユダヤ人の裏切り、十字架刑、それからよみがえりと昇天、そして再臨までを表していたのです。ヨセフはそんなことを意図していません。しかし、ヨセフが神を信じて生きていたので、神が彼を用いられたのです。

私の友人に、三歳で、心筋症で天に召された子がいます。彼は、すでにイエス様を信じていました。彼の最後は、チューブにつながれていて、親でさえが彼を抱くことができませんでした。しかし、延命措置をやめにするかどうか医者から尋ねられた時に、本人に聞いたそうです。「イエス様のところに生きたいか。」彼は、うなずきました。それでチューブを外し、親は彼がこの体から自由にされたことを、彼の体を抱きながら神に感謝して捧げました。そこで、その母親が葬儀の時にこう言ったのです。彼の名はカレブと言いますが、「カレブがベットでチューブでつながれている時に、イエス様が十字架に付けられているのと重なりました。」そうです、イエス様を信じたカレブ君は、死ぬ時にしっかりと、十字架に付けられていたキリストを証していたのです。

その他、私たちは、数多くの殉教者の栄光ある死を見えています。21 人のエジプト人クリスチャンの、イスラム国による死はまるで、かつてのキリシタンの 26 聖人を見ているかのようでした。その斬首は残虐でしたが、そこには聖い霊が流れていました。それで、その兄弟たちの町は、彼らがキリストの証しを立てられたことで大いに喜んだというのです。まるで、パウロの牢獄によって、多くの兄弟が元気づけられたのと同じです。

ですから、私たちがなぜ、この地上に残されているのか？救いが神の中では完成しており、私たちに永遠の命が与えられているのに、なぜ天にすぐに取り上げないで、この地上に置いておられるのか？それは、「私の身によって、キリストのすばらしさが現わされること」に他なりません。

## 2B 喜びの板挟み 21-26

1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

これが、ピリピ書のテーマとも言うべき言葉です。「私にとっては、生きることはキリスト」であります。生きていること、それがキリストになっている、ということです。私が今の私でいるのは、キリストがおられるから、という一途な姿勢です。私たちが、キリストご自身が自分にとっての生き甲斐になっているでしょうか？パウロは後に、自分が生粋のイスラエル人であり、律法においてパリサイ人で、その義について言うならば非難されるところのない者である、と言いましたが、「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。(3:7-8)」と言いました。キリストこそが自分の命です。

ある注解書に書いてあった話を紹介します。その牧師は、奥さんに連れられて、買い物に行きます。デパートで園芸用品の売り場に連れて行かれるそうです。そこにある骨組を見るのが好きなようですが、本人は興味がないので退屈します。けれども、その売り場に行く途中に、書店があるそうです。そこで彼は、生き返るのだそうです！何が自分を生き返らせるのか、自分が生き甲斐にしているのは何か？ということです。

1:22 しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。1:23 私は、その二つのもの間に板ばさみと なっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかに まさっています。1:24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。

パウロは、「死ぬこともまた益です」と 21 節で言いましたが、その理由がここに書いてあります。死ぬことは、キリストと共にいることになるからです。その前に、肉体の命が続くことを話していま すが、その時は、「豊かな実を結ぶことになる」と言っています。パウロはキリストこそが自分の生 き甲斐だと言っているわけですが、そうならなければ必ず、その人には豊かな実が結ばれます。「いや、私にはパウロのような目覚ましい働きは見られない。」と言うかもしれないのです。けれど も、パウロは鎖の中にいるのですよ。もしかしたら、実を結ぶように神が導いておられるのに、「キ リストによって、私は今、ここにいます。」という、身を捧げた姿勢を取っていないので、結ばれていな いのかもしれない。

そして、主にあって生きる者たちには、「喜びの板挟み」という問題が起こります。生きているなら ば、豊かな実を結ぶことができるが、死ぬほうが主と共にいることができるので、はるかに優っ ているという板挟みです。言い換えれば、ここまで死ぬことが優れているのか、そこまではっきりと死 後の世界の幻を見ているかどうか、にかかっています。

パウロは、第一に、既に「第三の天に引き上げられた」経験を持っています。「2コリント 12:2-4 私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に・・肉体のままであったか、私 は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。・・第三の天にまで 引き上げられました。私はこの人が、・・それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったか は知りません。神はご存じです。・・パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されてい ない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。」しかし、それはパウロにとって は二義的なことです。彼はこの幻によって、高ぶらないようにとサタンによる肉体の棘が与えられ て、その弱さの中で強さを誇りました。

一義的には、義と認められていることです。「ローマ 5:1-2 ですから、信仰によって義と認められ た私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによっ て、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望ん で大いに喜んでいます。」私たちが死を迎える時に、何が恐ろしいかと言いますと、死後の裁きで す。罪から来る報酬は死であり、人には死ぬことと、死後に裁きが定まっています(ヘブル 9:27)。 したがって、はたして天の御国に入れるのか、入っても、神に受け入れられるのだろうか？という 恐れが出てくる訳です。

しかし、律法に拠る行ないではなく、キリストの義の行ないによって、キリストを信じる信仰によ



って、その信仰が義と認められます。義と認められるというのは、神からキリストの義という贈り物が与えられることです。ただ、罪が赦されて、それが清められたことだけを意味しません。キリストご自身の義をもって私たちが認めてくださるのです。ですから、キリストにある恵み、その祝福が私たちのものにもなるのです！全く汚れていた私が、まるで道端で転がっていた赤ん坊を拾って、それをきれいに育てて、美しい女性として服も飾り物を下さるかのように、全く価値のないのに、一方的に、ただで豊かに恵んでくださるのです。それをパウロは、「神の栄光を望んで大いに喜んでる。」と言っています。

この確信があるので、私たちはただ神を賛美して、感謝して、自分が死ぬ時、キリストにお会いできる希望があるのです。ここで、「世を去ってキリストとともにいる」とあります。ここの「去る」とは、いろいろな意味があります。兵士に使われる時は、「テントをたたんで、前進しろ。」という時に使われます。私たちの肉体という天幕は取り去られて、神のくださる家を私たちは身に付けます。そして「去る」が政治用語として使われる時は、「囚人を解放する」という意味です。そうです、私たちはこの朽ちていく肉体という牢獄から解放されて、栄光の体を与えられるのです。それから、農業に使われる用語としては、「家畜のくびきを取る」という意味になります。私たちがキリストのゆえにくびきを追っていますが、この肉体を離れる時に、そのくびきは取られて安息に入ることができます。ですから、世を去ることは益なのです。

そして、ここではっきりと、世を去ることはそのまま「キリストと共にいる」ことになります。偽り教えがあり、それは「靈魂の意識がなくなる」という教えです。主にあって「眠っている者」という表現があります。イエス様もラザロについて「眠っている」と言われました。しかし、それは意識がないのではなく、再び甦るからこそ、その死が一時的だということを意味するために使われている表現です。つまり、死んだらそのまま天におられるキリストのご臨在の中に入るのです。

1:25 私はこのことを確信していますから、あなたがたの信仰の進歩と喜びとのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてといっしょにいるようになることを知っています。1:26 そうなれば、私はもう一度あなたがたのところに行けるので、私のことに関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。

パウロは、何らかの形で、御霊によってでしょうか、法廷において彼は釈放されるのではないかと示されたようです。「このことを確信していますから」と言っています。たとえ死んでも、それもまた益だが、今のところ主に生きることが示されているということでしょう。そして、釈放後にピリピの人々のところに行ける確信を得ています。「信仰の進歩と喜び」と言っていますが、ローマにおける福音の進歩だけでなく、ピリピにおける、信者の中におけるパウロの喜びの共有が起こる、ということです。パウロに与えられた主にある喜び、その信仰によって見えている幻、それらを彼らも共有して、彼らの信仰も進歩するということです。こうやって信仰というのは、ちょうど新しい土地を開拓するように、開拓されて、見えてくる世界、その幻が大きくなるのです。

そして、「私のことに関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。」と  
言っています。この誇りは、威張っているようなそれではありません。友人として、パウロはやっば  
りすごいぞ、という友情の分かち合いです。そして、その誇りは、イエス・キリストにあって増し加わ  
ります。溢れ出ると訳されているところもあります。喜んで、そして主にあって誇ります。溢れ流れ  
てきます。

こうして、鎖という制約があるのにも関わらず、いや、鎖というものを通してむしろ、主がご自分の  
国を広げられるという世界があることを見ました。皆さんにも、それを経験できます。それは一途に、  
キリストを自分の命とすることです。そうすれば、キリストの御国の広さを知ることができます。この  
方がどんな障害をも圧倒的に乗り越えられて、敵を飲み尽くすほどの洪水のように勝利から勝利  
へと進まれていることを知ることでしょう。